新型インフル

検査キット足らん

「心配受診」が増加■現場は節約

新型の豚インフルエンザの流行のピークが近づくにつれ、医療機関で受診する患者が増え、感染したかどうかを診断する簡易検査キット＝写真＝が各地で不足し始めている。念のために早めの検査を希望する「心配患者」が増えていることも一因だ。残り少なくなったキットを有効に利用しようと、疑いの低い段階では使わず「節約」に努める医療機関も目立ち始めた。

医薬品卸会社「東邦薬品」（東京）によると、キットは8月中旬から品薄状態が続いている。8月の販売実績（金額）は前年同月の約120倍。取引先のほとんどで製造が追いつかず、注文の一部しか対応できない状態だ。キットを生産している検査薬メーカー、ミズホメディー（佐賀県）の場合、フル稼働で3倍近い増産を続けているが注文に追いつかないという。

厚生労働省によると、キットを製造・輸入する国内メーカーは15社。同省が8月、輸入分を含む来年3月までの生産見通しについて業界から聞き取ったところ、昨年同時期の2・2倍の2800万回分だった。発症者は国民の2割、約2500万人と推計されているが、その2～3倍の受診者を予測する見方もあり、今後、各地でキットが不足する可能性が高い。

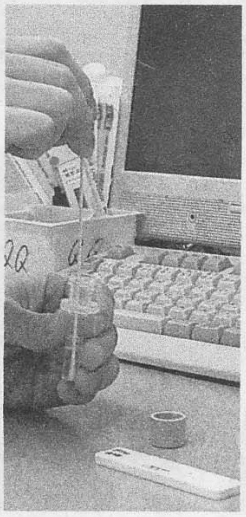
兵庫県尼崎市の長尾クリニックでは、5月末に地元で流行した際にもキットの在庫が底をつきかけたことがある。長尾和宏院長(51)は「備蓄したいが、大量に在庫を抱えるのは道義的にも抵抗がある」と悩ましげだ。

本来、治療薬を処方するのにキットによる検査は必要ではない。医師の診断だけで処方は可能だ。しかし、医療機関には平熱でも心配して「検査してほしい」と来る人や、出社するのに「陰性」の証明が必要だと訴えて検査を求める人が目立つという。

こうした事態を受け、医師らは現場で工夫を始めている。発症初期では陽性と出にくいため当日は帰宅させ、翌日も高熱やせきが続くなら再度訪れるよう指示。感染の疑いが強い濃厚接触者に「検査をせずにタミフルを処方する」と話す医師もいる。

長尾院長は「キットは診断の目安のひとつに過ぎない」と、キットを絶対視する風潮に警鐘を鳴らす。キットの判定をあてにしすぎると必要な治療が遅れてしまう心配もある。

厚労省新型インフルエンザ対策推進本部医療班は「診断は患者の症状や感染者との接触歴などから総合的にできる。キットは補助的なもの。ただ、より的確な診断には役立つので供給態勢を維持していきたい」と話す。（稲垣大志郎、浅見和生）



キーワード　簡易検査キット　鼻やのどから綿棒などで検体をとり、インフルエンザのA型かB型かを判別する。A型の場合は新型、季節性のソ連型、香港型のいずれかの可能性があるが、この時期はほとんどが新型とされる。キットの感度はそれほど高くなく、仮に「陰性」と出ても感染の可能性は完全には否定できない。